

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。6 『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。8 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

## 【説教】

今日の聖書箇所は、毎年のようにクリスマスに読まれるところです。クリスマスは世界中で祝われていて、全ての人にとって喜ばしい時だと皆思うと思います。しかし今日の聖書箇所では、誰もがみな御子イエスさまの誕生を喜んだわけではないことが分かります。御子イエス様の誕生に際し不安や恐れを抱いた人々がいました。それはヘロデというユダヤの王であり、そしてユダヤの首都エルサレムに住んでいる人たちでした。彼らはなぜ救い主イエスキリストの誕生を喜ばなかったのでしょうか。そこにはちょうどキリスト教の教会のある部分が嫌いだ、苦手だという人々の思いに、共通しているところがあると思います。

教会に行くとすぐに罪を悔い改めましょうとか私たちの罪を許してくださいと、そのように言われるからもう嫌になってしまうという思いです。確かに自分よりもよっぽど酷いことをしている人や不正を働いている人たちが周りにたくさんいると思います。そういう人たちのことは目をつぶって、どうして大した悪事を働いてない自分が反省しなくてはいけないんだと思います。教会はもっと他に、罪を指摘して反省させなくてはならない相手がたくさんいるのではないかと納得できません。ヘロデ王やエルサレムの人々は、ちょうどこれと同じ思いでありました。当時ユダヤのエルサレムは、ローマ帝国

の外国人たちに支配されていました。経済的にも政治的にも外国人たちに不公平な扱いを受け住民たちは税金を二重に取られ、苦しい生活を送ることを強いられていました。虐げられ、圧迫を受けているのは自分達です。罪を反省し悔い改めなければいけないのは外国人たちの方でした。その小さなユダヤの人々に対して自らの罪を自覚し悔い改めましょうと言うことは、大きな力で不正を行う人々のあり方を軽く見ているのだと受け取られます。圧迫され虐げられている人々にとっては、まず目の前の苦しみを取り除けてくれない限り自らの内面を吟味するという余裕はありません。言葉の発し方も一つ間違えると、喜ばしい良い知らせであるはずの福音が人々を余計に追い込む悪い知らせになりかねません。

こういうたとえがされます。大きなゾウと小さなネズミがいます。ゾウはネズミのしっぽを踏んでいました。その状況でゾウもネズミも同じ罪人だ。みんな自らの罪を悔い改めて神さまに心を向けましょうと言ったところでネズミは素直にその言葉を聞けるでしょうか。まずそのゾウの足をネズミのしっぽからどけることが先決ではないかとそう思うと思います。自分が尻尾を踏まれていない人はネズミの痛みがなかなか分かりません。ですので、ややもすると綺麗な言葉で大きな罪を覆い隠してしまうことになりかねないのです。そうすることで、しっぽを踏み続けるゾウの残酷さを自覚しないまま、その暗闇の業を支援してしまうことを知らずに行ってしまいます。

キリスト教は偽善的だと言われてしまうことがあると思いますが、その場合はこういった無自覚な意識のあり方に原因があるわけです。この場合はやはりゾウに向かって、ネズミのしっぽから足をどけなさいと まず最初に言わないとダメですね。心が固くなり周りが信じられなくなって、攻撃的になってしまうのには、実は理由があるのですね。まず相手の人々が置かれている状況を理解しようとする努力が必要だと思います。小さなネズミが受けた傷に、最初に心を向けることがすなわち神さまの御心にそっていることです。

クリスマスに生まれた御子イエスさまは、その点で言いますとどうであったでしょうか。イエスさまの最後というのは、このエルサレムで裁判にかけられ死刑宣告を受けたというものでした。エルサレムにあったゴルゴダの丘で十字架刑にかけられたのです。その十字架刑の判決の最高責任者は誰だったかと言いますと、ポンテオ・ピラトというローマ帝国から派遣された総督でした。つまり大きなゾウの方ですね。一番人々を苦しめているという大罪を犯していた、一番大きな人物の命令によって殺害されたのです。このことは何を意味してるかと言えば、イエスさまはちゃんとすべきことを、一番言われなくてはいけない人に向かって語っていたということを現しています。大きな力によって人々の心も体も支配し、不正や搾取を行っていた大きなゾウに向かって、「そんなことしていたらダメなんだ！」とはっきり言ったのです。ピラトにとってイエスさまは、1番の目の上のたんこぶ

でありました。自らの残酷さに居直っているピラトのような人々にこそ、イエスさまは体を張って悔い改めを求めたのでした。それが、キリストの十字架の大切な意味です。

そしてその上で、イエスさまはエルサレムの人々にもやはり悔い改めを求めました。それは何故かと言えば、こういうことです。ネズミでも、より小さな例えば蟻のような虫の足を踏んでしまうことがあるわけです。この聖書箇所で次のように言われています。「ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決して一番小さなものではない。」ベツレヘムに比べて、エルサレムはユダの首都であり経済的にも政治的にも信仰においても中心地でありました。人や物はなんでも皆大都市であるエルサレムに集まって行きました。それに対して、小さな地方の町の一つであるベツレヘムは、疲弊して行くばかりです。イエスさまのお育ちになったナザレの村もエルサレムからすれば小さな蟻のような存在です。「エルサレムよ、あなた達はピラトと同じことをベツレヘムやナザレに対して行っているのではないか」。このこともイエスさまは、ちゃんと公平に偏ることなくおっしゃいました。エルサレムに住んでいた祭司長たち富裕層は(4節)、地方の農民の土地を借金の担保とし、結果的に土地を取り上げていました。農民たちは小作化するか奴隷となるか、中には過酷な日雇い労働者にならざるをえないところまで没落してしまいました(20章1節以下参照)。

このイエスさまの言葉は、人々を二つに分けて行きます。聞ける人もいれば、聞けない人もいます。ヘロデ王や祭司長・律法学者たちは、聞くことは出来ずに耳を閉ざしてしまいました。そうして、やがてポンテオ・ピラトと共にこのエルサレムでイエスさまを十字架につけてしまいます。いかに人間が抱える闇というのは、光を遠ざけ拒絶してしまうものなのかをよく物語っていると思います。

御子イエスさまの言葉を聞くことが出来たのは、より小さい方の人々でした。ゾウよりもネズミの方です。ネズミよりも蟻の方でした。イエスさまはこのマタイ福音書で、次のような内容のことをおっしゃいます。貧しい人よ、悲しむ人よ、あなた達こそ世の光なのだ。神さまの正しさのために迫害されるものは幸いなのだ。神の国はその人たちのものだからである(5章)。能力や力の強さでは、大きい人々にとうていかないません。しかし、父なる神を受け入れ、イエスさまの言葉を聞くことにおいては、その貧しさや悲しさこそが何よりの財産に変わるのですね。たとえ小さな者であっても、神の御心に従う生き方によって天においては誰よりも喜ばれる者になれるのです。

虐げられても、圧迫されても、共にいますインマヌエルの神によって、また立ち上がるその姿がこの暗闇の世に光をもたらします。不正を行われても、搾取されても、自分はその道には歩まず別の正しい道に行く。強い力でいくら脅かされても、自分の方は他の人に向かって暴力は振るわない。そういった、神さまの御心に従った正しい生き方だけが、最終的には人々を真に生かすことができるのですね。

その証拠と言ってはなんですが、この聖書の箇所ではイエスさまのお誕生を喜び祝いに来た人々のことをあげることができると思います。その人々とは、東方からやってきた占星術の学者たちです。ユダヤの地から見て東方といえば、かつてバビロニアやペルシアといったユダヤを支配していた国々があったところです。当時のバビロニアやペルシアの外国の人々も、ローマ帝国のピラトたちと同じようにネズミのしっぽをやはり踏みつけていました。その当時、バビロニアにはダニエルという神さまの言葉を取り次ぐ預言者がいました。囚われの身でありましたが、その知恵と神の御心に従った正しい生き方によって、バビロニアの人々を悔い改めに導くことを試みていました。その時、ダニエルの前に立ちはだかったのが、この占星術の学者たちです。その時は、神に敵対し、預言者ダニエルを亡き者にしようと闇の業を行っていた人々です。しかし今、その占星術の学者たちは、神の御子イエスさまを拝みに来たのです。このことは、どんなに強い大きな力を持っていても、最後には結局のところ御子イエス・キリストに助けを、救いを求めるようになるのだということを表しているのですね。

占星術の学者たちの悔い改めは、ちょうどローマ帝国の人々の未来を現しています。一時は、イエスさまを拒絶し、敵対して十字架につけてしまった外国の人々でありましたが、しかしそのイエスさまの罪の贖いによって、赦され生まれ変わって行くチャンスももらいました。そして、それまで聖書の民であったエルサレムの人々よりも、より先に、ずっと熱心に、イエスさまに従う民へと変わって行くことだって出来るのだと言いたいのですね。彼らを導き先行く星の光は、低く頭を下げた救いを求める者たちを、必ず神の御子の生まれるところに誘導してくれるのだと示しているのです。

ポンティオ・ピラトも、ヘロデ王も、祭司長たちや律法学者たちも、イエスさまの肉体を滅ぼすことは出来ます。しかし、死者の中から復活されたイエス・キリストを滅ぼすことは、誰にも出来ません。この世界の暗闇に誕生なされた御子イエス・キリストの光は、どんな迫害や暴力によっても、虐げによっても、消し去ることは出来ないのです。いつの世にも必ず最後に残るのは、神の言葉です。全ての暗闇に光を灯すその時まで、イエス・キリストはこの世界で輝き続けます。御子イエス・キリストの光が、この世界に訪れたことを、共に喜びましょう。